

「世界の諸地域」学習の視点と方法

—単元を貫く主題による地理学習—



竹内裕一（千葉大学名誉教授）

1 学習指導要領改訂と 「世界の諸地域」学習

2017年に改訂された現行学習指導要領は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を、育成すべき資質・能力の三つの柱として明記し、「教科固有な内容と汎用的な資質・能力を結び付け、両者の調和的で一体的な実現を目指すこと」（奈須正裕（2017）『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社、p.467）をねらっている。ここでいう教科固有の内容とは、その教科等の特質に応じた「見方・考え方」のことである。地理的分野の場合は、「地理的な見方・考え方」を「社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること」（文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、p.29）と定義づけ、考察、構想する際の「視点や方法（考え方）」であるとしている。具体的には、①位置や分布、②場所、③人間と自然環境との相互依存関係、④空間的相互依存作用、⑤地域という五つの視点を明記している。

地理的分野の改訂は、ほぼ2008年版を踏襲した内容になっている。「世界の諸地域」学習に限ると、カリキュラム構成原理は地誌学習であり、州ごとに主題を設けて単元を構想する主題学習も変化はない。ただし、従前と異なるのは、「地球的課題」を主題として設定することを求めている点である。これは、地誌学習の目標である地域的特色の理解の学習を、ESDやSDGsの視点から、持続可能な社会づくりに寄与する学習として展開することを目指したことによる。

2 「地球的課題」を主題とした 「世界の諸地域」学習

（1）主題探究過程を見通した単元計画の重要性

それでは、具体的にどのような授業を構想すればよいのか。ここでは、教科書（『中学社会 地理地域に学ぶ』教育出版）の「アジア州」を事例に、具体的な授業展開を考察してみよう。

pp.48～49はアジア州の導入資料である。「世界の諸地域」学習では、単元を単位とした主題（単元を貫く主題）を設け、その主題を探究していく過程として1時間ごとの授業（本時）を位置づけ、単元計画を構想することになる。

アジア州の場合、単元を貫く主題は、「アジアでは、なぜ経済が発展したのだろうか」である。世界の工場と言われるまでに経済発展を遂げた中国や日本企業が多く進出している東南アジア地域、ICT産業の発展により工業構造の高度化が進むインドなど、アジア地域はめざましい経済発展を遂げている。こうした「発展するアジア」では、国や地域により経済発展の状況や要因が異なっている。一方、経済発展に伴う貧富の差の拡大や都市への過度な人口集中、環境汚染等、経済発展によって引き起こされた問題も多く抱えている。アジア州の学習では、経済発展を主題として東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中央アジア地域の経済発展の実態とその過程、発展要因、問題点等を地誌的に学んでいくことになる。

さらに、「アジアでは、なぜ経済が発展したのだろうか」という単元を貫く主題を探究していく際のキーワードが「人口問題」（p.49）である。この「人口問題」は地球的課題の一つとして設定されたものであり、アジアの経済発展を支える大量の低賃金労働者の存在、経済発展に伴う都市への人口集中と過疎・過密問題、人口爆発の実態と対策等の学習内容を各地域の地誌学習の中に組み込んでいくことになる。

以上のような単元を貫く主題による「世界の諸地域」学習を実践するには、あらかじめ設定した主題に即して1時間ごとの授業を位置づける単元計画が重要になってくる。従来の地理学習では、

ややもすると教科書の見開き2ページ分を1時間でこなすという1話完結型の授業が多かった。生徒たちの「地理より歴史が好き」という評価は、具体的な「お話」や因果関係で1時間ごとの授業をつないで学習を深めていく歴史学習に対して、地理学習は1時間ごとの授業内容がぶつ切りで単発的、国や地域を代えても同じ構成の平板な授業内容に起因していると思われる。こうした硬直化した地理学習を克服するためにも、教科書を参考にしながら、単元を貫く主題による「世界の諸地域」学習を構想したい。そのためには、事前に単元計画を十分に練っておく必要がある。

(2) 1時間(本時)の授業展開

1時間の授業は、単元を貫く主題を踏まえて構想することになる。例えば、中国の「③巨大な人口を支える農業と多様な民族」(pp.54～55)の学習では、本時の学習課題を「巨大な人口を抱えた中国では、民族政策や農業についてどのような特徴がみられるでしょうか」と設定している。この学習課題は、言うまでもなく単元を貫く主題を受けて設定されたものであり、中国の急速な経済発展を支えた安価で豊富な労働力(人口)の存在を中心にして、中国が直面する人口問題(人口増加、地域間格差と人口移動、急速に進む高齢化、少数民族問題等)の実態とその対策を学習することになる。

教科書の③と④(pp.56～57)では、中国の経済発展の実態と問題点を学ぶことになるが、経済発展がもたらす弊害について興味深い教材(記述)が提供されている。例えば、「地理の窓」の「食生活の変化」(p.55)である。「…生活が豊かになると、食品の流通が活発になって、北部でも米のご飯を食べることが一般的なり、内陸部でも海産物を手に入れやすくなりました。さらに、だいた、畜産物、水産物、乳製品などの輸入も増加しています。」という記述からは、中国の人たちが豊かになることで、地球全体の食料の需給バランスが崩れてしまいかねないという実態を読み取ることが出来る。中国の人々が豊かになることは好ましいことである。しかし、中国の人々が豊かになればなるほど、世界の食料生産と需要のバランスが崩れ、国家間の食料の奪い合いが起きる。それでは、どうすればよいのか?経済発展をストップさせることで問題は解決するのだろうか?

この教材は、持続可能な社会をどのように構築

していくのかを考える格好の素材である。前述のように、今次の学習指導要領では、ESDやSDGsの視点から、持続可能な社会づくりに向けた具体的な行動選択の在り方を模索することを求めている。教科書に記載されたこうした教材を手がかりに、調べ学習や討論学習を組織することにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが出来るだろう。

3 「世界の諸地域」学習の課題

現行学習指導要領は、内容知と方法知の統一的展開や教科固有の学習を通じた資質・能力の育成、教科等の本質としての「見方・考え方」の明確化、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善等、1989年版以降の改訂で実現できなかった課題や問題点を洗い出し、それらを克服するための方略を具体的に示した。さらに、グローバル化の進展やICT技術の発展等により急激な変化を遂げる現代社会の動向を捉え、未来に生きる子どもたちが身に付けるべき資質・能力を獲得するための教科内容と授業づくりの視点を明示した点において大いに評価できるだろう。

しかし、そこには克服しなければならない課題も山積している。とりわけ、単元を貫く主題による学習過程の創造の趣旨を真に理解し、実践に移せるかどうかは地理的分野の命脈を握っている。振り返れば1989年版の「新しい学力観」への転換以降、中学校地理的分野の学習は、地誌学習(地域の選択的履修)→地理的な見方・考え方、学び方学習→主題を設定した地誌学習(動態地誌的学習)と推移してきた。こうした変化は社会の急激な変化に対応したものであったが、教育現場においてはその趣旨が十分に理解されず、有効に機能してこなかった。今次の改訂では、今まで以上に実践者の単元(授業)構成力が問われていることを肝に銘じておく必要があるだろう。

さらに、高校において必修科目「地理総合」が新設されたことにより、小・中・高を見通した系統的な地理カリキュラムを構想することが求められている。地誌学習で構成されている中学校地理学習がどのような役割を担うべきか。小学校社会科と高校「地理総合」・「地理探究」を視野に入れたダイナミックな実践が求められている。